
ある日の屋上より～僕と生徒会長～

緑僧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の屋上より〜僕と生徒会長〜

【Nコード】

N6453B

【作者名】

緑僧

【あらすじ】

男振り続ける彼女それを見ていた僕

（前書き）

駄文＋誤字＋僕（主人公？）が自意識過剰ですが読んで頂けたら幸いです。

「ごめんなさい。」

また振った。

もう何回目だ？

彼女は美人だった。

告白した彼も美形だった。

今度こそお似合いかとも思われたが彼女は迷う素振りすら見せなかった。

彼女が初めて告白されたその日から僕はずっと彼女の知らない場所で彼女の告白に立ち会っていた。

つけている訳ではなかった。彼女が告白されるのがいつも屋上で屋上が僕の昼寝場所であるだけだった。

今日も彼女には見えない配水タンクの裏、彼女の告白されるのが目に入った。

断る彼女の姿が見えた。

生徒会長

長身

美しい顔立ち

彼女がモテない訳が無かった。

肩を落としながらふらふらと去って行く彼を横目にふと僕は眠気に襲われた。

いつも通りの日常に僕も飽きて眠り込んだ。

目が覚めると辺りは濡れていた。

4月と言えど雨は降る、しかし僕は濡れてなかった。

傘

そして眠った生徒会長が

僕を包んでいた。

傘と生徒会長に包まれていた僕は濡れていなかった。

ずっとこうもしていられないのでそろりと寝ている生徒会長を起こさないように起き上がった。

起き上がると体制が崩れた生徒会長が眠たそうに目を開けた。

途端に赤くなる生徒会長。

鈍感では無い僕は彼女が男を振り続ける理由に気が付いてしまった。男に恨まれると言つめんどくささとかくだらない日常が壊れると言つ嬉しさを雨の上がった屋上で生徒会長を前に感じていた。

雨を降らせた雲もいつの間にか消え、辺りは夕焼けに染まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6453b/>

ある日の屋上より～僕と生徒会長～

2010年10月11日10時09分発行